

Secret of God～神の秘密～

アドアステラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

日本の孤児院で育った孤独な少年、青嵐透。5歳の時、彼を迎えに来た一人の老人がいた。彼の名はアルバス・ダンブルドア。ダンブルドアに引き取られて彼の保護下で暮らしていた透は11歳になると自分が魔法使いだという事実を知る。そして透がホグワーツ魔法魔術学校に入学し、運命の歯車が動き出す…。

天賦の才能を持ち文武両道の透は、ある同級生の2人から「神」と呼ばれ始める。透はホグワーツ特急で出会った「生き残った男の子」ハリー・ポッターと、ムードメーカー的存在のロン・ウィーズリー、秀才でおしやまなハーマイオニー・グレンジャー、そして自らを「神」と呼んでいて自分と同じく日本人の早霧滯、結城晶子をはじめとする友人達と共に、魔法に満ちた平和な学校生活を送るが、運命はそれを許さなかった。明らかになる衝撃の事実。忌まわしい血筋と大切な親友との板挟み。そして自分という「呪われた」存在。数々の逃れられない呪縛に悩み傷付く透に、やがて「決断」の時が迫る…。これは普通の、しかし「運命に選ばれた」「神」の物語。

目次

ハリー・ポッターと賢者の石編	引き裂かれた魂
〈prólogo〉	1
第1話 手紙と神の前兆	3

引き裂かれた魂。

それが「彼」に対する第一印象であった。しかしそこには希望の兆しが確かにある。そうアルバス・ダンブルドアは信じた。目の前の幼い5歳児は、否応無くかつての教え子の面影を思い起こさせる。救えなかった生徒。後悔が胸を締めつける。止められなかった無力な自分を何度憎んだことか…。教師失格だ、と思う。だからこそ権力を選ぶことなく教師としての道を貫き続ける事を決意したのだ。これ以上、闇に堕ちる生徒を増やすものか。それは愚かな男の最後のプライドであり、最後の使命であった。

何としてでも「彼ら」を守り抜く――。今まで重ねてきた自らの罪を償うために「彼ら」を導き、人として在るべき姿に育てあげるのみだ。

それでも、思う。自分のような人間が果たして「彼ら」の人生のレールを敷いてしまっても良いのだろうか、と。その第一歩としてこの場に来たというのに、固めたはずの決意が揺らぎかけた。

だが、自分以外の誰がこの任務を遂行できる？誰が無垢な少年達の命を預かる責任を負える？

無意識に「彼」に手を伸ばす。その途端、脳裏を鮮明な映像が占めた。

正義感の強い父と、面倒見のよい母。奔放な弟と、心優しい妹。

笑顔溢れる家族だった。特別裕福な家庭ではなかったが、家族と過ごした平凡な日常こそが何にも変えられない幸福であった。

しかし、その幸福は呆気なく砕け散る。他でもない自分のせいだ。...

消えてゆく家族と入れ替わるようにして現れたのは、古き友の面影であった。

かつては彼の美しい容姿と群を抜いた才能のとりこになったものだ。彼と共に駆け抜けた日々は、ほろ苦く、だが甘くかけがえのない思い出として今でも記憶に焼きついている。

若かりし頃の親友の名をそつと口にした瞬間。夢は、覚めた。
知らず知らずのうちに頬を伝っていた涙を拭う。

自分はこの幼子を通して救えなかった者達を見たのか？失われた
過去を見たのか？

願わくば、あの光景を現実にしたい。しかし、本当は分かっていた。
そんな願いは幻想に過ぎないのだと。

顔を上げる。

「彼」は賢そうな瞳でダンブルドアを見た。不思議な子だ。「彼」自身
の血筋を否定してしまうほどに意志の強い瞳。いずれ才能を開花さ
せる事だろう。何もかも、真実を知る時も来るだろう。だがそれまで
は、時が来るまでは…

「君は君自身の道を歩むのじゃよ」

ダンブルドアは男の子と自分自身に言い聞かせるように、強く、優
しく言葉を発し、「彼」を連れてその場から消え去った。

ハリー・ポッターと賢者の石編 第1話 手紙く神の前兆く

この3年間、何不自由のない生活を送ってきた。

郵便受けに入っていた一通の手紙を意を決して手に取りながら、青嵐透はふとそう思った。

五歳の誕生日から、透はずっとグリモールド・プレイス12番地で生活してきた。イギリスにある由緒正しい屋敷だ。住み始めた当初こそ動く肖像画や屋敷しもべ妖精に驚かされていたが、今はもう慣れた。埃だらけで蜘蛛の巣が天井から垂れ下がっていた不潔な屋敷内の掃除も、三度の食事も衣類の洗濯も、仏頂面のしもべ妖精の手にかかれば一瞬だ。しもべ妖精は透の話し相手にはなってくれないが、透自身、他者との会話よりも読書や勉強を好むため問題ない。時々やってくる訪問者たちが持つてくる未知の書物に、透は興味津々だった。

魔法界。人間の力では成し得ない不思議な魔法や術を行使する、魔女・魔法使いが住む世界。初めは何の冗談かと思った。しかし、あの「運命の日」までを孤児院で孤独に過ごしてきた透にとって、魔法ほど心を引かれるものはなかった。星の数ほどもある数多の呪文。多様な多様な幻想的な魔法生物。今に至るまでの壮大な歴史。非魔法族（魔法族は「マグル」と呼ぶ）の世界とはあまりにも違い過ぎる別天地だ。そうして来る日も来る日も魔法界についての知識を蓄えていた透は、もちろん魔法学校の存在も知っていた。透が住むイギリスには「ホグワーツ魔法魔術学校」という有名な学校があるらしい。その学校の事は、1カ月に1度ほどの頻度で透のもとを訪れるアルバス・ダンブルドアさんからも聞いていた。グリフィンドール、スリザリン、ハッフルパフ、レイブンクローという4つの寮。動く階段やゴースト。11才の誕生日を迎えた魔法族の子供のもとに送られてくる入学許可証…。

もちろん信じてはいた。知れば知るほど魔法界に憧れを抱くようになった。それでも…

透は改めて自分宛の手紙に視線を落とした。とうとう、この日がやってきたのだ。

「ロンドン　グリモールド・プレイス12番地　2階の右側の寝室
青嵐透様」

エメラルド色のインクで記された宛名を優に30回は読み返しただろうか。透は震える手で封筒を開き、中に入っていた紙を引っ張り出した。紙面に几帳面な文字が並んでいる。

『親愛なる青嵐殿』

このたびホグワーツ魔法魔術学校にめでたく入学を許可されましたこと、心よりお喜び申し上げます。教科書並びに必要な教材の――』

まだ文言は続いていたが、透の耳は背後で生じた擦れるような音を聞き逃さなかった。素早く振り向くと、見慣れた人物が朗らかに笑っている。悪戯を見つけたかのようなお茶目な笑顔だ。

彼の名は、アルバス・ダンブルドア。

「透よ、また見つかってしまったのう。降参じゃよ。今日こそは君の驚く顔を目にする事ができると踏んでいたが、考えがちと甘かったかね?」

ゆったりとした、耳に心地良く響く声。挨拶がわりにやれやれと肩をすくめた彼は、透が手にしている黄色味がかかった手紙に視線を落とすや否や、コホンと咳払いをして空気を変えた。

「何はともあれ、11才のお誕生日おめでとう、透。わしからもちよつとしたお祝いの品を贈ろう。気に入るといいんじゃないが……」

手渡された小包に目を丸くすると、ダンブルドアさんは穏やかに「ほんの気持ちじゃよ」と微笑んだ。感謝の言葉を口にし、恐縮しつつ包みを解く。と、黒革の折財布と共に、何か固い小さなものが転がり出てきた。：鍵?色褪せ、錆びている銅色の鍵だ。何に使うのやら……。首を傾げていると「用途は時が来れば分かるじやろう」という言葉がかかった。不思議な贈り物も含まれていたが、嬉しい事に変わりはない。

「ありがとうございます、ダンブルドアさん」

「ほっほっほ、礼など不要じゃ。ところで透、その手紙にも書かれていると思うが、君は9月1日より、ホグワーツ魔法魔術学校の生徒となる。その前に色々な準備が必要なのじゃが…2枚目の手紙を見てくれるかのう?」

先ほどは気づきもしなかった2枚目の紙に目を通す。制服や教科書、学用品などのリストだが、どこで手に入るのだろうか? ニコニコ顔のダンブルドアさんを見、疑問を口にする。

「あの…こういう物は、どこで手に入るのでしょうか」

「ダイアゴン横丁じゃよ」と答えが返ってきた。ダイアゴン横丁。聞き覚えがある。記憶を呼び起こし…思い出した。魔法使いや魔法が必要とくる、ありとあらゆる魔法道具が売られている横丁だ。確か、ロンドンにあるパブと繋がっているのだったか? 透がまだ見ぬ横丁に思いを馳せている間にも、相手は話を進めていく。

「あいにくわしには休みというものが無いのじゃが、君を一人で買い物させるのはいささか不安でう。そこで、わしの友人に頼んで君に同行してもらおうかと考えておる。良いかね?」

もちろん異論などない。

「はい。お願いします」

「上々、上々!…おや、もうこんな時間じゃ。では、わしはそろそろお暇しよう。透、君の魔法界デビューが楽しいものになるよう祈っておる」

そう言葉を残し、ダンブルドアさんはクルリと一回転した。透はつむじ風のように消え失せた老魔法使いに思いを巡らせる。前々から感じていたが、彼はなかなか忙しいようだ。今日の滞在は他の日に比べれば長い方で、普段は本を数冊とちよつとした土産話を残して帰ってしまう。

不意にコトリと音がした。顔を上げると、郵便受けの上にフクロウが止まっている。その嘴にくわえていた、フクロウの体の倍ほどもある紙袋を手に取り、やわらかな羽毛を撫でてやる。弱々しくホーと鳴き、小さな来客者は空の彼方へと飛び去っていった。かなり危なっかしい飛び方だったのが心配だ。

紙袋と手紙を抱えて屋敷の中へと戻る。薄日が差し込む陰気な玄関を忍び足で通り過ぎて2階に上がる。右側の扉をくぐると、そこは透の部屋だ。ベッドとクローゼットと机と本棚、それに出窓。床には本棚に入りきらなかった何十冊もの本が山と積まれ、チェスセットやカードなどのゲームは部屋の隅に置かれている。簡素だが広い部屋の中心で、透は紙袋を開いた。

まず目に飛び込んできたのは、大きな白い箱である。その下には紺色のセーター。冬場の寒い時期に重宝しそうだ。モコモコのセーターを畳み直してから箱の方を開くと：チョコレートケーキが入っていた。中央には砂糖とクリームで『透へ 11才のお誕生日おめでとう!!』と書かれている。同封されていた『11才のお誕生日おめでとう。いよいよホグワーツの年ね。近々会いましょう!』というメッセージの綴られたカードを見つめながら、透は頬を緩めたのだった。